

中日の社交呼称について

劉 柏 林

要 旨

ビジネスの相手、上司と部下、同僚と友達、先生と生徒、老若男女などの関係において、最初に声をかける際、呼びかけに何らかの言葉を使わないわけにはいかない。呼称は人間同士のコミュニケーションをする際の符号とも言えるが、その言葉の使い方には民族の文化・風俗の内容が含まれる。そればかりでなく、その使い方は歴史的なカテゴリーに属し、社会、地域、民族の人間関係のあり方によって変わる。それは時代の色彩を色濃く反映し、歴史の発展に従って変化するものである。例えば、中国語の「小姐」の使い方は、時代・人・地域などによって、持つ意味が違う。プライベートな場面における中国語の呼称は日本語より複雑である。

本研究は、初対面の中国人にどのような呼称語を使えばよいか、中国語の呼称は日本語の呼称とどういう違いがあるか、ビジネスの際に相手あるいは相手に関係する人をどう呼べばよいか、こうした中国語の社交呼称の現象と呼称の仕方の問題を分析し、そこに存在するある種の規則性を概括するものである。中国の社交呼称には次のような特徴がある。親族名称を借用して虚構的親族関係を作って呼称する。相手の実際の年齢より高めに相手を呼称する。職場の呼称では、副責任者を呼ぶ場合にも「副」を抜いた職名で呼称する。人名が二字姓の場合、呼び捨てが普通である。こうした問題を正確に把握できれば、小説を読む際にも、そこに出てくる呼称語が場面に応じて持つ微妙なニュアンスをも正しく理解できるだろう。

キーワード：親族名称。虚構的親戚関係。職場呼称。外国人呼称。社会大家庭。

- 一、はじめに
- 二、プライベートな場面での呼称
 - ① 親族名称の借用
 - ② 相手の年齢より少し高めに
 - ③ 一般的な社会での呼称
- 三、ビジネスにおいて
 - ① 職場での呼称
 - ② 特殊な呼称
 - ③ 外国人に対する呼称
- 四、終わりに

一、はじめに

社交呼称というのは人間社会でコミュニケーションをする際に用いる呼称語のことである。ビジネスの相手、上司と部下、同僚と友達、先生と生徒、老若男女などの関係において、最初に声をかける際、呼びかけに何らかの言葉を使わないわけにはいかない。呼称は人間同士がコミュニケーションをする際の符号とも言えるが、その言葉の使い方には民族の文化、風俗の内容が中に含まれている。そればかりでなく呼称語は歴史的なカテゴリーに属し、社会、地域、民族の人間関係のあり方にしたがって変わり、時代の色彩を色濃く反映し、歴史の発展に従って変化する。呼称には親族呼称¹⁾と社会呼称がある。例えば、中国の町を歩いていて、相手に呼びかけ、道を尋ねる際、「师傅」「先生」「老大爷」「老大妈」などと呼びかけをし、相手の注意を自分の方に向ける。もし、相手が50代の男性の大学教員だとすると、「老大爷」或いは「师傅」と呼んだら、あまり喜ばれないだろう。最近、中国語を習っている学生が初めて中国の大学に留学して、宿舎の掃除をする中年の女性に「小姐你好」と挨拶したら、“我不是小姐。”（私は「小姐」ではありません）という答えが返ってきた。学生が「もし「小姐」でなかったら、「老姐」なのね」と言ったら、相手はそれを聞いて大笑いしたそうである。現在の中国北方では「小姐」という呼称が特に嫌われている訳ではないが、この場合の女性は年齢的に合わないと感じて否定したのである。これは呼称と実体の間にズレがあった一つの具体例と言えよう。最近中国の新聞に時々「××のキャバレー（酒吧）でまた数名の「小姐」が検挙された」といった記事が載っている。こういった状況は「小姐」という言葉に特殊な語感が伴っている結果であり、広東省の一部地域では、もしあなたが相手の若い女性を「小姐」と呼んだら嫌われるに違いない。この地域では「小姐」はホステスの代名詞になっており、普通の女性のことでないのだから、

そう呼ばれたら、一般の若い女性にとっては、人格が侮辱されたことになるのである。それでは、若い女性をどのように呼べばよいのか。適当な言葉が見当たらずに、人々は少々困惑させられる。そのため、《中国文化報》2000年10月30日に「不叫“小姐”叫什么」（「小姐」と呼ばなければ何と呼ぶか）という文章が載った。現在の中国では若い女性を呼ぶ際「小姐」としか呼べないのではないかというのである。今すぐに適当な表現を探し当てるのは難しいが、これは陳建民氏が『語言文化社会新探』の中に「中国語の呼称について配偶者をどう呼ぶか」という章で述べているように「言語は一種の自己調節の機能をもっており、呼称に一部混乱が生じ均衡を失うことがあっても、それは一時的なもので、最終的に全体でバランスがとれた状態に自動調節される」。²⁾しかし、どのように相手を呼称すればよいのか、これはやさしいようでいて実に難しい問題である。間違えたら相手に不快感を与えることになる。社交における呼称問題は中国人にとっても、日本人にとっても、すんなりとは片付かないものである。

初対面の中国人にどのような呼称語を使えばよいのか、中国語の呼称は、日本語の呼称とどういう違いがあるか、ビジネスの際にどのように相手あるいは相手に関係する人を呼べばよいのか。中国語の小説を読む時にもその中に現れた呼称語について、場面や人間関係の中で帯びている意味を正しく理解しなければ読書の価値は大いに減ずることになる。

本稿では、社交呼称について、中国語と日本語を対照しながら分析し、中日両国語の呼称語の異同について述べてみたい。

二、プライベートな場面での諸呼称

社交上の呼称は、社会、地域、民族の人間関係のあり方にしたがって、それぞれの特色を持ち、同時に時代の色彩をも色濃く反映するものである。

古代の中国では、人を直接名で呼ぶのは、失礼なことになる。人間関係と場面によって使い分けるために当時の知識人には、名のほかに字（あざな）と号があった。相手の字を呼ぶことは相手に対して尊敬の気持ちを表わし、自分を名前で言えば謙遜することであった。例えば、「三国志」に有名な諸葛孔明がいる。彼は名が「亮」、字が「孔明」で、号は「臥龍」である。中国の唐の時代における有名な詩人李白は字が「太白」である。今日普通の人には、字も号もないが、目上の人を名前で直接呼ぶのは、やはり失礼なことであり、言うてはならない。

現在の中国では幼稚園や学校の先生などは園児や教え子をフルネームで直接呼ぶが、一般的に親しい人や目下の人に対しては、フルネームで例えば、「呂京生」「孫晓燕」と呼ぶか、或は姓抜きで名前だけ「京生」「晓燕」と呼ぶ。しかし、これまで会ったことのない人や目上の人などに対して何と呼ぶかは、その人と初めて対面する前に常に考えさせられる問題である。

日本人が普段人を呼ぶ際、双方の立場を規定する具体的な社会的関係（親族関係を含む）がない場合、年上か年下かが最大の基準となり、相手の年齢と自分との関係によって「××さん」「××君」「××ちゃん」のどれかを選んで呼ぶことが一番多い。目上の人と同僚の人に向かって、「××さん」とも言い、年下の者、目下の者に向かっては、隔たりがなく親しい間柄であれば、男性に「××君」、女性に「××さん」ということが多い。この場合「××」は、普通姓であって、もし名であれば、相手と自分の仲が個人的感情を表わしてもよい関係であることを示すことになる。若い女性などを「ちゃん」を付けて言うこともあるが、これは家族的な特に小さい子供に対するような親愛の情を表わしながら呼んでいるのである。また日本語では、相手を呼ぶのにフルネームで言うことは、特に本人を特定する必要がある場面以外にはほとんどない。「××さん」「××君」「××ちゃん」のような呼びかけ方は種類も少なく、使い分けもはっきりしていて、中国人の目には本当に便利だと映る。これに相当する中国語の呼称語は、「老×」、「小×」、「大×」、「(姓抜きで) 名前」であるが、これらは、いずれも相手の苗字を知っていることを前提としているものである。しかし、初めて出会った人にこれらの呼称で呼んだら、相手に馴れ馴れしいと感じさせ、不自然な言い方だという印象を与える。中国ではプライベートな場面において、もし初めて会う人の苗字が分かっている場合と分かっている場合、また相手の年齢と性別などによって、呼称は下の表①のどれかを使うことになる。

表① 社交における呼び方

話者との関係	相手の性別	中国語の呼称	日本語の呼称
祖父母と同世代の人に	男	老爷爷, 老大爷, 姓+爷爷, 老爷子	おじいさん, (おじいちゃん), おたく
	女	老奶奶, 老大娘, 姓+奶奶	おばあさん, (おばあちゃん), おたく
親と同世代の人に	男	大伯, 大爷, 伯伯, 大叔, 叔叔	おじさん, だんなさん, おたく
	女	大婶, 大娘, 大妈, 阿姨	おばさん, おかみさん, おたく
自分と同世代の人に	男	大哥, 老兄	お兄さん (あなた), おたく
		老弟, 小弟弟	お兄さん (あなた) 君, おたく
	女	(未婚者或は既婚者) 大姐 (既婚者) 大嫂 (嫂子) 夫の姓 (名前)+嫂, 嫂夫人	お姉さん (あなた), おたく
		小妹妹, 大妹子, 弟妹,	お姉さん (あなた)
自分より下の世代の人に	男	小同学, 小朋友, 小伙子	君, あなた, 学生さん, ぼく (小学生以下)
	女	小同学, 小朋友, 小姑娘	娘さん, 君, あなた

注：中国語においては ①同世代或いはそれ以上の人を呼ぶ時に、知っている人に対しては、表中の呼称の前に姓をつけて呼ぶことが多い。②自分より上の世代の人を呼ぶ時は「老大爷」、「老大娘」、「叔叔」、「阿姨」の使用頻度が高い。表中の__下線で示してある。

日本語の「お兄さん」「お姉さん」という呼称の範囲は中国の「大哥」「老兄」と「大姐」「大嫂」だけではなく、「老弟」「小弟」と「小妹妹」「大妹子」の意味も含まれる。これは中国語と日本語の呼称語の大きな違いだと言える。

① 親族名称の借用

表①の呼称語の大部分は、親族関係の人に用いる呼称語の転用であるが、非親族の人に用いること（親族名称の虚構的使用法ともいう）によって、相手に親近感を持たせ、親しい感じを与えることになる。

中国語で言う「嫂子」はもともと血縁関係を表すもので、自分の兄の妻（兄嫁）の意であるが、血縁のない、同郷や近所の人の妻にもよく使い、親しみの意を表わす。「嫂」の前に苗字と名前をつけることができ、その場合「子」は省かれて、「刘大嫂」「孟嫂」「国庆嫂」…などと言うことになる。この呼称は「姓+奶奶」と同じく、前につけられた苗字あるいは名前は本人ではなく、夫のものである。古い中国では女性は結婚すれば、男性に従属する者になると見なされ、夫の苗字で呼ばれていた。このような配偶者の姓を使う呼び方は中国語の呼称語の中に封建的な時代の痕が残っている唯一のものだと言えよう。

「嫂夫人」は昔は自分より年下の友人の妻を呼称する時に使われていた。現在ではインテリの間でやはり使われている。

最近中国のメディアによく「空嫂」（既婚のスチュワーデス）、「军嫂」（人民解放軍軍人の妻）、「红嫂」（人民解放軍の兵士の世話する婦人）という呼称が現れている。このような呼称には人々の敬意が含まれている。日本語にはこのような呼称は見られないのではないだろうか。

中国社会におけるコミュニケーションに使用される呼称語は「师傅」「小姐」など社会的地位や存在を表わす言葉に由来するもののほかに、前掲表①のように相手を親族として見立て、親族間の呼称を転用することが多い。中国語の親族呼称の転用には以下のようなパターンがある。

- | | |
|--|---|
| 1, 姓+親族呼称 | 李爷爷, 张奶奶, 刘叔叔, 胡大哥, 孟大嫂…… |
| 2, 名+親族呼称 | 建国叔叔, 晓燕大姐, 国华大哥……
「2」は「1」より相当親しい間柄に使用される呼称である。 |
| 3, 姓名+親族呼称 | 高士其爷爷, 孙敬修爷爷, 雷锋叔叔……
これは限られた知名度の高い人に対して、青少年が使う呼称である。 |
| 4, 職名+親族呼称 | 「工人叔叔」「农民伯伯」「解放军叔叔」「售货员阿姨」……
これも青少年が使う呼称である。 |

日本人同士も中国人同士もコミュニケーションの言葉の中にはこのような仮の家族関係語がよくみられる。中国では自分の子供に來客を親族名称で呼ばせるのが普通であるが、日本では親族名称の借用を使うこともあるが、中国人ほど厳格ではない。來客に「××さん」で呼ばせることもありうる。中国ではもし來客が親の同僚か友人だったら、その家の子供が日本語の「××さん」にあたる「老×」「小×」で呼んだら、「それは失礼だ」と親に叱

られることになる。日本語にも、中国語のように知らない人間の間で家族関係を仮想して会話を交わすことがある。しかし、「お父さん」「お母さん」という呼称の虚構的な用法が日本で使われるのは一般的ではない。日本にきた中国人留学生が「私の日本のお母さん、お父さん」という呼び方をするのを耳にすることがある。こういう呼称に対して、普通の日本人にはなれなれしいとか、特別な恩義があるのだと思うかもしれない。確かに世間には親より親しい人はいないのだから、留学生も日本人の保証人などに対して、よほどの感謝する気持ちがないとそう呼ばないだろう。中国語には「干爹」(義父)「干妈」(義母)という呼称がある。これは元来継父、養父を言うが、その意味のほかに血のつながりがなく、双方の合意に基づいて、父(母)子の誓いをして、結んだ義理の「親戚関係」であることを言うことも多い。「干爹」「干妈」があれば「干儿子」「干女儿」(義理の子)という呼称もある。これらは個人関係が分け隔てのないたいへん親しい間柄にあることを示すが、大人同士の話し合いによって、そう決めたのであり、法律上制約を受けるものではない。

上述のような呼称は、社会における交際に用いられるものであり、プライベートな場合に限られ、中国では「礼俗性親属呼称」(注2)と呼ばれている。ビジネス交渉やあらたまった場合などでは、このような呼称は、控えるのが格調ある物言いになる。しかし、筆者の観察では現実の社交において、中国人同士の実際のビジネスにしろ、中国人と日本人の間のビジネスにしろ、ある目的のために、例えば、相手のご機嫌をとるために、親しい雰囲気を作りたいということが起こる。筆者はそういう通訳を依頼されたことが何回かあるが、ビジネスのための会話であっても、双方の話が弾んで、このような虚構的親戚関係の呼称が自然に出てくることは確かにある。

② 相手の年齢より少し高めに

日本人は人を呼称する際、できるだけ相手を実際の年齢より若く呼称することがあるが、中国では女性の方は日本人と同じく、若く見てほしいが、男性の方は呼称する場合、自分の年齢より少し高めにしてほしいのである。これは日本と正反対である。中国人にとって相手の年齢に見合う言い方より、少し高めに呼称することの方が相手を敬って自分を卑下することになる。これは一つの美德と見なされている。10数年前私は日本の青年訪中国を案内して、中国の幼稚園や小学校などを訪問したことがあるが、北京の幼稚園に入ると子供たちは喜んで日本から来た若い男女を迎えて、「叔叔，阿姨好！」(おじさん、おばさん こんにちは！)と挨拶したのだが、日本の若い男女は最初ショックを受けたようで、恥ずかしそうな表情を見せていた。訪中国の人たちは「お兄さん」「お姉さん」と呼んでほしかったのである。日本人は自分のことを若く見てもらいたいのが普通である。中国では「哥哥」(お兄さん)、「姐姐」(お姉さん)という呼称語は話者の「同輩」(同世代の者)の意味なので、

中日の社交呼称について

敬称の意味が薄い。それで子供たちは「おじさん」「おばさん」と呼びかけたわけである。この場合はお互いの習慣が正反対であるために、せっかくの気持ちもすれ違いになってしまったのである。

日本の老人たちは、知らない20代以上の男性に「お兄さん」、女性に「お姉さん」と呼ぶが、こういう場合中国語でも同じである。しかし、中国では老人以外の人は相手を敬って、相手の年齢より少し高めの呼称を使うのが無難だと考えられる。相手が男性で自分より年齢が上か、下かが分からない場合は、「大哥」と呼び、相手が女性で自分より年齢が上か、下か分からないし、既婚か、未婚かがはっきりしない場合には「大姐」と呼ぶ。結婚している女性だったら、「大嫂」と呼び、相手が自分の年より20才ぐらい上だったら、男性を「叔叔」、女性を「阿姨」と呼ぶ。もし相手の苗字が事前に分れば、その呼称語の前に姓を冠して、「刘大哥」「李大姐」と言えば、相手に親しみを覚えてもらえる。

③ 一般的な社会呼称

「先生」「小姐」「同志」「师傅」は中国で使用頻度の高い呼称語である。1950年代まで中国人は成年の男性に「老爷」「先生」、未成年の男性に「少爷」、未婚の女性に「小姐」、結婚した女性に「太太」という旧い時代の呼称を継続して使用していた。50年代の後半から中国では政治運動が続き、「老爷」「先生」「少爷」と「小姐」「太太」はブルジョア階級の観念による言葉だと見なされ、耳ざわりの悪い呼称になったため、だんだん使わなくなった。特に役人と金持ちの成年男性を「老爷」と言い、その子弟を「少爷」という搾取階級に属する者として敵意まで含めながら、広く使われた時期があったが、こうした呼称は現在ほとんど聞かれなくなった。

新中国になってから、「同志」が呼称語の中心的位置を占めるようになった。そして改革開放の時代になるまで一番よく用いられた呼称語は何といても「同志」であり、「同志」のようにいつでもどこでも聞かれる便利な呼称語はなかった。中国では人々のコミュニケーションにおいて、男女を問わず、年齢（子供を除いて）、職業、社会的地位を問わず、みな互いに「同志」と呼称しあうことができた。街を歩いていて面識のない人や政府機関の役人やデパートの店員、ホテルの服務員、レストランの服務員などにも対してもみな「同志」と呼びかけていた。もう少し丁寧にすれば年配の方に「老同志」、若い人に「小同志」、男女を区別して、はっきりするには「男同志」「女同志」、相手に親しくしてもらうために相手の苗字か、職業を冠して、「张同志」「王同志」「护士同志」「服务员同志」などと使われていた。

「同志」という表現が最初に現れたのは『後漢書・劉陶伝』の中の「所与交友，必也同志。」（ともに交友する所のものは必ず志を同じす）である。ここでは志向趣味が同じである人を指す。

中国には孫文の「革命尚未成功，同志們仍須努力。」という名句がある。ここの同志は志と信念を同じくする同一政党の人を指している。中国では共産党にしる、国民党にしる皆「同志」を使ってきた。「同志」について『現代漢語詞典』（註2）は「①為共同的理想、事業而奋斗的人，特指同一个党的成员。②人们惯用彼此之间的称呼；」（1，共通した理想，事業のために奮闘する人のこと，特に同一政党のメンバーを指す。2，人々が互いに呼び合う慣用語）と解釈している。新しい中国が成立してから中央政府は官と民，解放軍の幹部と兵士の間の一致を強調し，互いに「同志」という言葉を使って呼称し合うことを正式に提唱したことがある。そこで「同志」という言葉が中国人の互いの呼称語になった。相手の職業，性別，年齢を問わず，「同志」と呼び合うことで，自然に親しみが感じられ，中国の各層にかなり幅広く浸透していったのである。しかし，文化大革命の時代にはこの「同志」という呼称は階級闘争における人の評価判断を示すバロメーターになり，敏感な意味を持つものになった。批判された人は思想改造をし，自己反省した後に，最初に人から「同志」と呼ばれた時には，自分の反省が認められたことになり，涙が出るほど感激したという話が多い。今日でも誤りを犯した幹部に対して，もしそれでもやはり「××同志」と呼称されるなら，まあ，まだ大丈夫だ。やはり「人民内部の矛盾」であり，身の自由がある。そうでなければ，もう失脚が決定したことを示すという意味合いで「敵と味方の矛盾」となる。身の自由が無くなることが多い。「同志」という呼称は中国の現代史の社会的気分を強く反映した言葉であると言える。

今でも中国の政府機関，解放軍の会議など正式な場面ではやはり「同志」と呼称するが，職場の同僚や隣近所の人には普段直接呼びかける際には使用しない。北京市のバスの車掌さんが今日でも習慣的に乗客のことを「同志」と呼び，「哪位同志还没买票？」（乗車券をまだお求めでないのはどなたですか）とアナウンスしている。しかし，現在日常生活ではイデオロギーの匂いを強くする「同志」を用いるのは堅苦しいと感じる人が多くなり，そのため「同志」に代わって「師傅」という呼称が幅広く使われるようになった。この「師傅」という呼称は，その淵源を辿れば中国文化の変遷を伺うことができる。「師傅」は最初には教える人の通称であった。『穀梁伝・昭公十九年』に「羈貫成童，不就師傅，父之罪也。」（羈貫（^{きかん}羈貫は子供がまげを結う年になること）の児童が先生（師傅）について教えを受けないのは父親の罪である。）とある。その後，役職の名にもなったことがあるが，後に技芸を教える師匠，先生に対して用いる敬称になったのである。今日でも中国の工場では生産技能をもつ労働者の普通の呼称であるが，若い労働者が自分より年上の労働者に，仕事年限の短い方が長い人に，或いは双方，あまり知らない人たちが互いに呼び合う時に用いる。文化大革命の時「労働者階級がすべてを指導する」という毛沢東の教えに従って，「労働者階級毛沢東思想宣伝隊」が学校や研究機関に入って毛沢東の指示を実行した。そこか

ら「师傅」の社会的地位が中国で急上昇し、言葉のインフレのように何時の間にか普通の人に対する敬称を表わす言葉になってきたのである。何年前か、私は道を尋ねる人に「师傅」と初めて呼ばれた時、その呼称を少し滑稽だと思ったが、現在中国では日常生活で大変よく用いられる。上海では年齢と関係なく「师傅」の前に「老」を入れて、「老师傅」となり、もっと丁寧な意味を表わすところまでいっている。北京ではこのような表現は古参労働者にしか用いることができないのだが、いずれにせよ、「师傅」にしる、「老师傅」にしる、二十代前半以下の人に用いるのはやはり可笑しいものである。現在、運転手、工場の労働者、ホテルのサービス員、商店の店員などに呼びかけるときや名前を知らない人への呼びかけに極普通に用いる。

「同志」は中国文化大革命までの時代を代表する呼称語であると言えようが、「师傅」には改革开放後の経済発展の匂いがあるように感じられる。この十数年間、中国社会では職業や性別などを問わず、「师傅」という呼称語をやたらに使うことに抵抗する人が学者や知識層には少なくない。だから、インテリ風な人に対しては「先生」と呼称することをお薦めする。

中国人は社会一般の共有の師というような尊敬の気持ちを持って「××先生」と呼ぶ。孫中山先生、魯迅先生などがそれである。中国の古書によると、「先生」という二文字は最初『論語』に出たということで、「有事、弟子服其劳；有酒食先生饌。」（事あれば、弟子その劳に服し、酒食あれば、先生に饌す「さしあげる」）という表現がある。ここの「弟子」は学生を指すのではなく年下の者を指しているのであり、「先生」は学校の教員ではなく、年長者（親を含む）のことである。その後『孟子』という本に「先生将何之」（先生將た何れにかゆかんとす）、「先生何为出此言也」（先生何為れぞ、この言を出すや。）などの言葉が現れてから、「先生」は人に対する敬称になったのである。昔の中国では「先生」という呼称は大変大事にされ、年長者で学識の高い人に対してしか用いられなかった。『中日大辞典』（大修館書店）には中国語の「先生」に関する解釈が八項示されている。「①学問・技術を教授する人に対する尊称、ひいて一般に有徳の人に対する尊称：「老師」に同じ。②成人男性に対する尊称。③（女性が）自分の夫、或いは他人の夫をいう。④医者。⑤旧時、商店の出納係。⑥旧時、講釈師、人相見・八卦見・方位師に対する尊称。⑦旧時、道士に対する尊称。⑧旧時、妓女をいった。」というものである。①については現在中国の大学では「学問・技術を教授する人に対する尊称…老師」に同じ」というよりも学識の高い教授に対する敬称であると説明した方が適切であろう。北京大学、北京師範大学などの歴史の長い大学ではずっと昔からこういう習慣が伝わってきている。②は現代の中国で広く使われている。③は一時期使わなかったが、最近若い人がよく使っている。④は普通の病院のお医者さん（西洋医）にはあまり使わないが、漢方医に対して用いることが多い。⑤⑥は旧い中国の言葉に「账房先生」「算命先生」というような呼称が昔の小説に現れる

ぐらいである。⑦⑧は現在は使われない。

しかしこの十数年、「先生」という呼称は職業、性別、年齢を問わず、「同志」の代わりにも用いられるようになっており、それと共に「先生」が元来もっていた相手に対する尊敬の意味もだんだん薄くなってきた。成年の男性（時には職業女性にも）に対するただの尊称の意味に止まっており、香港や台湾の「先生」の意味とほぼ同じになった。ところが、相手が農民である場合、「先生」と呼んだら、相手は馬鹿にされた気がするだろう。一方、日本では「先生」という呼称は敬意を示すための便利な言葉で、学習研究社の『国語辞典』では「指導者。教員・医師・弁護士などの職業についている人に対する敬称。」と説明してある。中国語の「先生」がよく使われる対象となる人は①学問があり、名声の高い人（孫中山先生、魯迅先生）②外国人③医者④民主党派の人士④知らないインテリ風の25才以上の男性⑤文化人、知名度の高い女性にも（魯迅の奥さんに許広平先生）などである。

現在の中国では、男性を「先生」というのと並んで、若い女性を「小姐」という呼称が広く定着してきているようである（広東省などの一部の地域を除く）。「小姐」という呼称は中国の唐の時代では女性を言う通称であり、宋の時代には地位のわりあい低い女性を指していた。それ以後、何時の間にか尊称として官僚とお金持ちの未婚の娘を呼称することになった。『現代漢語詞典』には「小姐」は「①旧时有钱人家里仆人称主人的女儿。（旧い時代金持ちの家で働く使用人の屋敷のお嬢様に対する呼称）。②对年轻女子的尊称（若い女性に対する尊称）」という説明がある。もともと使用人が主人の娘に対して用いる呼称で、（日本語の「お嬢さま」の意味で）、今は①の意味はなくなったが、他人の娘に対する尊称として用いられている。前に触れたが、「小姐」は「太太」と同じように中国の文化大革命の時に「资产阶级臭小姐」（ブルジョアの臭いお嬢さま）「娇小姐」（甘やかされるお嬢さま）という意味で批判の言葉として用いられていたもので、長い間普通に使える言葉ではなかった。しかし現在では再び未婚の女性に対する通称に戻ってきた。商店、ホテルのサービス業などのサービス業に従事している若い女性に対する呼びかけに用いたら、別に嫌な感じは持たず、喜んで対応してくれる。（広東省など一部の地域を除く）現在の「小姐」の呼称は敬意が薄くても感じのよい響きを与える便利な呼称となっている。日本語の「ミス…」、「…さん」、「…嬢」、「…ガール」に当たる。中国では現在「空中小姐」（スチュワーデス）、「导游小姐」（旅行社の若い女性ガイド）、「导购小姐」（デパートの案内係）などがそれぞれの職場でお客さんに愛想よく応対している。営業を離れた場面でも「小姐」は未婚の若い女性を呼ぶ敬称として用いるが、こういう場合の意味は日本語の「お嬢さん、××さん」に当たる。ただ、中年以降の未婚女性には「小姐」と呼ぶよりも「大姐」と呼んだ方がいいだろう。

「老板」＝ほめごろし

レストランで服務員に最初、「老板您在哪发财？」（直訳：社長はどこで儲けておられます

か／御宅はどこにお勤めですか)と聞かれた時に私は笑いを押さえることができなかった。「老板」という表現は旧い中国では個人営業者のことであった。最初、文化大革命の時代には資本家並みに批判された。みんなあまりいい感じはもっていなかった言葉である。後になって、中国の経済が発展し活性化するにつれて、個人営業者が多くなり、「老板」になればきつと儲かると思われ、憧れの対象ということになっている。そういうわけで「老板」という呼称も復活してきたのである。中国の商品には「老板桌」(社長用デスク)「老板椅」(社長用の椅子)「老板鞋」(社長用の皮靴)などの「老板」を付けて高級を装うものが結構多く、なかなかの売れ行きだそうである。

「老板」という呼称に対して、中国のインテリの間では依然として、かなり抵抗がある。中国の《人民日報》1998年10月4日付けに載った『称谓之忧』(称谓の憂い)という文章に「有些地方是可以称“小姐”或“先生”的,有些地方则不可以。称“同志”为“小姐”或“先生”,称领导为“老板”或“大爷”,如此称谓令人堪忧。」(地域によっては「小姐」或いは「先生」と呼称してもよいが、地域によっては呼称してはいけないところがある。「同志」を「小姐」或いは「先生」と呼び、責任者を「老板」或いは「大爷」という呼称することは心配にたえない)とある。ここで言われているように呼称によって、異なった性質の人間関係を表すことになるので、「同志」の代わりに外の呼称をやたらに用いるのは禁物である。

日本人はあまり知らない人に対しては親族呼称で相手と呼ぶことは少なく、よく「すみません…」「恐れ入りますが…」というふうに呼称語抜き表現をするが、このような呼びかけ方は中国で「親族礼俗呼称」を使うのに比べて硬い感じがする。

今、中国には若い男女が相手に対する親しさを表わすための俗っぽい呼称語もある。例えば、同年代の男に「哥们儿」(兄貴)、女に「姐们儿」(姉御)というのがある。とても親しい人と呼ぶ時に「铁哥们儿」という表現もある。ここで「鉄」というのは絶対確かだというほどの意味だから、もしあなたが相手に「铁哥们儿」と言われるようになったなら、あなたは相手にとって、あなたを信じきって打ち明けられないことはないというほどの存在になっていることを意味している。

中国で人に道を尋ねられた場合、尋ねかけてきた人が自分より年上で、場合によっては自分より何十歳も年上の老人からさえも「大哥」とか「大姐」と呼ばれることがある。子供は、50代前半位までの中年の人に向かってはもちろん、20代の青年に対してさえも「叔叔」「阿姨」と呼ぶ。これらの表現が持つ社会的意味についてはそれぞれ上40頁～41頁ですでに述べた。

三、ビジネスにおいて

① 職場での呼称「小×」「老×」「大×」と「姓+職名」

中国の職場での呼称は「内」と「外」が区別されている。「内」では互いに肩書きにして「老刘」、「小李」、「大马」というように、「老×」「小×」「大×」の呼び方をよく用いる。「老×」と呼ばれる人は年が大きく、尊敬される人であり、「小×」と呼ばれる人は年が若いし、親しまれている。「大×」と呼ばれた人はそんなに年をとっていないが、背丈が高い人である。しかし、この「老×」「小×」「大×」の呼び方は複姓（「端木」「諸葛」など2文字以上のもの）の場合には用いられない。このような呼称は日本語の「××さん、××君」に相当する。中国人の間では時には「小×」と呼ばれた人が仕事の経験も少なく、社会的地位もやや低いと暗示されることがある。

中国では、会話の場面に職場以外の人を交えると、肩書き（職名・役名・身分）を呼ぶことが多い。この点において、日本語の一般的な言い方は中国語と大体同じで、「職名」で呼称するのが原則である。しかし、日本語では外に対し、あらたまった場合、「橋本社長」とか「大塚専務」とか言うが、普段「内」では「社長」とか「専務」とか「常務」とか姓抜きにして呼ぶことが多い。ところが、職名などを呼称に用いる場合、中国語では姓抜きの形はあまり用いられない。職名の前に必ず苗字が付く。「江总（经理）」（江社長）とか、「胡书记」（胡書記長）とか、「王部长」である。中国では官庁で働いている職員はみな同志関係であり、互いに呼び合う時には「老江」「小李」「大王」と呼称する場合が多いが、最近中国の職場同士の間、上司のことを呼称する場合、「長」抜きの現象がでてきた。「王局长」のことを「王局」、「張科長」のことを「张科」という。中央政府の官庁ほど肩書き抜き、つまり「××同志」の形で呼称する傾向が強い。

あらたまった場合に肩書きの代わりに「フルネーム+同志」或いは、姓と名が三文字の場合「姓名+同志」が用いられる。そのほかに中央では例えば、「邓小平」を「邓小平同志」、「小平同志」と親しく呼ぶ。中国では成年者なら誰だって鄧小平に対してこういう呼び方ができる。（小中学生は「邓爷爷」とか「小平爷爷」と呼ぶ。その人の苗字と名前が二文字しかない場合、その苗字は省略できない。例えば、元中国全国人民代表大会の委員長喬石の場合、「石同志」とは呼べなく、「喬石同志」としか呼べず、対外的には苗字+肩書きで「喬委員長」と呼称する。若い人を言う時は「小×同志」と呼ぶ。（小李同志とか言う）

中国の職場での呼称の原則は、上に見た通りであるが、企業や商店などでは幹部と技術者に対する呼称は職名を用いるのが主流である。「×总经理」或いは「×总」、「×厂长」、「×总工程师」或いは（×总）、「×工程师」（×工）などである。労働者には「×师傅」を用いる。若い人の場合一律に「小×」「大×」と呼ぶ。「大×」と呼ばれる人は年が上ではなく、

中日の社交呼称について

体が大きいから「大×」と呼ぶのである。上に述べたように、日本の企業では中国と同じく上司に対する呼称は職名を用いるのが主流であるが、違っているところは姓抜きがすることである。「社長」「専務」「常務」「部長」などと呼ぶ。ただし、これは下から上に対してであって、上から下を呼ぶ時は「××君」が多い。中国人は第三者に自分の上司のことをくだけて「头儿」というのがあるが、この「头儿」は肩書きではない。これは日本語の「ボス」に似ている。こういう呼び方に最近反対する人が多くなった。

中国の教育界、医療関係部門では普段互いに「×老师」と呼称し合うのが普通である。年配の教授には「×先生」「×教授」と呼ぶ。医療衛生部門では「×老师」（医科大学付属病院で）か「×医生」「×大夫」と呼称する。しかし、最近の中国では教育分野と全く関係のない芸能界においても、俳優、歌手、タレントを直接呼びかける際に「×老师」と呼んでいる。これは日本で考えられないことだろう。中国のプロ文革の時に「老师」は「臭老九」として批判される立場に立たされ、社会的地位が低かった。当時、教員の仕事をやめた人が少なくなかったのである。この二十数年、中国では教育は民族の生存にかかわる重要な位置に置かれるようになったため、教員の株も上がり、大中小学校の教員を求職する者が多くなってきた。「老师」という呼称も大分聞こえがよくなったのである。相手に学ぶところがあるから、「×老师」と呼ぶようになったのであろう。

中国ではどの職場でも若い人に苗字の前に「小」を付け、自分より年上の人に「老」を付け、「小×」「老×」で呼べば、親しく感じられる。これはもっとも普通な言い方である。苗字が二文字（複姓）「欧阳」「司马」「端木」の場合は「小」「老」を付けない方が多い。何故かという、中国人の姓は普通一文字、一音節のものが多く、それだけでははっきり聞き取れないから、苗字の前に「小」「老」をつけると、安定感が出る。日本人の苗字は二文字が多いから、中国人は習慣的に「田中」（tián zhōng）、「山田」（shān tián）と苗字だけで呼称するのが一般的であり、決して日本語の場合と同じく呼び捨てにはならない。中国人は親しい友だちを呼ぶときには呼び捨てでもかまわない。名前だけを呼ぶのが普通である。呼称が簡単なほど、関係が親しいと見ることもできる。例えば、「吕京生」という人がいるが、彼の周りの人は彼を「京生」と呼んでいる。

日本の政府機関では直接対話の時に「××さん」の呼称を使うことも多いが、上に向かっては苗字を言わないで職名で呼ぶのが普通である。「局長」「課長」「審議官」という。中国の政府機関では姓+役職名で「王局长」「李所长」などのようにいう。

中国の軍隊では、副官職の人を呼称する時はつきり「王副团长」というが、政府機関や企業などでは副職名の人を呼ぶ場合「副」をぬいて呼ぶのが普通である。「副」であるが、「副」をつけないで呼称するのが通例なのである。つまり「唐副省长」「王副校长」を普通「唐省长」「王校长」と呼ぶことになる。このような呼称に違和感を持つ日本人が多いが、こ

れもそれぞれの生活文化の表現と理解することが必要だろう。

② 特殊な呼称

中国では相当な地位にあり、厚い声望を集めている年配の人に対する尊称として姓の後に「×老」「×公」をつけて、特別な尊敬の意を表わすことがある。国家主席だった董必武を「董老」、有名な文学者である郭沫若を「郭老」と呼び、教育に大きな業績を残した葉聖陶と中国仏教協会の会長趙朴初の場合はやや特殊だが、「叶圣老」と「赵朴老」と尊敬を込めて親しく呼ばれている。茅盾は「茅公」、中日友好協会の元会長寥承志は「寥公」と呼ばれていた。中国で「×老」と「×公」は最高の呼称で、そう呼ばれるのは世の中で相当の尊敬を受けている人に限られていて、七十代、八十代の世代に数えるぐらいの人しかない。「×公」という呼び方は、年齢の若い人や技量、経歴の浅い人が年長者や技量と経歴の深い人に対して用いる。資格と経歴が同じぐらいの人の間では互いに「公」で呼び合い、尊敬し合う意味を表わす。もし、年長の人の方が自分より若く、地位の高い人に「公」を使ったら、ごますりと言われる。若いうちに「×老」とか「×公」と呼ばれるほどの世の尊敬を集める人はなく、「×老」とか「×公」は年配ではない人に対して使う場合には皮肉の意味を含んだものになるのである。

③ 外国人に対する呼称

国際会議や宴会などの冒頭の挨拶に英語の決まり文句のようなものがあり、いつも「Ladies and gentlemen」というが、これに相当する中国語は“女士们, 先生们”で、「Mr. …, Mrs. …, Ms. …」に相当する中国語は「…先生, …夫人, …小姐」である。中国人がお客さんによく「先生」「女士」「小姐」の呼称を使うことは英語の影響を受けたのかも知れない。しかし、中国人は外国人のすべてのお客さんにこういう呼び方をするのではなく、社会主義国から来たお客さんや資本主義国から来た友好政党の人をやはり「同志」で呼称する。その他のお客さんの場合、資本主義国から来た男性を「先生」、結婚している女性を「夫人」「女士」、未婚の女性を「小姐」「女士」と呼ぶのである。日本から中国に行ったことのある男性なら誰だって「先生」と呼ばれた覚えがあると思う。中国人に先生と呼ばれたらすぐ「先生と呼ばれるほどのばかでなし」と言いたくなる日本人も少なくないだろうが、普通中国人に用いられている先生は日本語の「先生」というよりは、むしろ英語の「Mr」の意味合いが強く、男の人に呼びかける際の敬称なのである。実際に敬意のこもった言葉である。中国では男性に「先生」と呼称するのみならず、教養の高い女性にも用いられている。中国語を話す日本人は中国人と付き合う際「先生」を大胆に用いるべきである。もし相手の苗字あるいは職名を知っていれば、姓と職名を冠して「张先生」、「部长先生」、

中日の社交呼称について

40代以上の女性には「×女士」、未婚の20代前後の若い女性には「×小姐」と呼び、苗字がわからない場合、職名+「先生」「小姐」で、呼んでもかまわないと思われる。男性の服務員に「服务员先生」、女性の服務員に「服务员小姐」、弁護士に対して「律师先生」、看護婦に対して「护士小姐」などと言うのである。日本語には「職名+先生」というような呼称の仕方は普通はない。

前にもふれたが、中国人は一文字、一音節の苗字が多いので、職場の人や親しい人を呼ぶ場合「老×」「小×」と呼んでいる。中国語では二音節の表現に安定感があり、中国人は二文字の二音節で呼称することに慣れてしまったので、多くの場合、二文字で人を呼んでいる。中日合弁会社で一緒に働いている日本人が中国人に親しまれ、よく中国人に苗字だけで、「田中」(tián zhōng)とか「木村」(mù cūn)と呼ばれるが、これは本文中で言ったように決して人を呼び捨てにする意味ではないのである。日本人は複姓の人が多いため、二音節で呼ぶのが習慣になった中国人は何も敬称をつけないのであって、もし、「老」をつけ、「老田中」と呼ばれたら、「田中」という人はよほどの年配だと思われるに違いない。

四、終わりに

呼称語は文化的背景、地域、個人の差によって様々な言い方がある。アメリカの会社では若い人が自分の年よりだいぶ上の人に呼び捨てをし、姓抜きにして、名前だけを呼ぶ。アメリカ人はこれを親しく感じるようだ。日本語の呼称語「××君」「××さん」には男女の性差があるが、中国語のそれにあたる「老×」「小×」「大×」には性差がない。日本語で人に呼びかける際、男性にしても、女性にしても「……さん」と呼んだ方が平等で無難であると思われるかもしれないが、中国人は国家指導者を「……さん」と読んだら、呼ばれた人に対する尊敬度が低いと思われる。例えば、田中（角栄）さん、毛（沢東）さんなどである。敬意を込めて呼ぶときに必ず「田中角栄元首相」「毛沢東主席」という。中国の改革開放によって、思想が開放され、毛沢東のことを「老毛」と呼んでいる人も少なくない。呼称語は社会の文化的、政治的背景、伝統・習慣と密接な関わりを持っているものであり、そこには社会の変革と共に移り変わる人々の意識が窺えるものである。中国人は年齢より親族の世代関係を重視する。プライベートな場面においては、親族関係にもとづく呼称語を用いるのが中国人の世間付き合いの特徴であり、世代の別は厳格に言葉の別になって表現されるのである。伝統的な中国社会においては、一族と家庭が最も基本的な単位として社会的生産活動を行ってきたので、人々は社会全体を、拡大された家庭「社会大家庭」と見ることがよく行われる。「四海之内皆兄弟」である。いわゆる「称兄道弟」（相手を兄と称し自分を弟という）＝（兄弟のようにつきあう）というのがそれである。これは日本人が

「お前と俺との仲」と言ったりするのと心情的には共通している。中国では「同志」という呼称語を復活させたいという声もある。この呼称は中国人にとって大変便利なものである。日本人は中国人に対して呼称語を用いる際には、場所と相手にもよるが、空港、ホテル、レストラン、銀行、商店などで働いている男性には年齢を問わずに「先生」、若い女性には「小姐」、男女を問わずに「师傅」を使えばいい。工場や農村或いは普通の市民の出入りする商店、食堂、自由市場ではやはり「师傅」と呼ぶのがよいだろう。ビジネスの商談などの場合、相手の社会的地位、年齢、性別及び相手の習慣を考慮して「苗字＋職名」で呼称するのがよいが、副官職の人には「副」をとって呼ぶことをお勧めする。日本人としては中国人の30代以上の男性には「先生」か「师傅」、女性に「女士」か「师傅」、20代前後の若い女性には「小姐」あるいは「姑娘」、小中学生（男女を問わず）には「小朋友」「小同学」と呼びかければまず無難であろう。

呼称語が適切に使えば、呼称に関わる文化の違いによる誤解が避けられ、敬意と親しみの気持ちが通い合い、コミュニケーションがスムーズにいく。現代中国語の人称代名詞、特に中国語の第二人称「您」は相手を直接呼ぶのに、一番簡単便利で、丁寧な呼び方である。

他の言語を知ることによって自分の言語についても理解を深めていけば、異文化をつなぐ心は広く育ってゆくだろう。呼称の仕方を適確に把握して慣れることが大切である。

註：小稿は愛知大学の中島敏夫先生と山田克利先生に教示を仰いだところがある。

注

- 1) 「中日の親族呼称について」 劉 柏林『言語と文化』第五号 愛知大学語学教育研究室 2001年7月
- 2) 『語言文化社会新探』 陳建民 上海教育出版社 1989年12月

参考書：

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1, (愛知大学)『中日大辞典』 | 大修館1994年5月(第二版) |
| 2, 『汉语词汇与文化』 | 北京大学出版社1995年8月 |
| 3, 『語文知識電視講座』 | 广播出版社1982年2月 |
| 4, 『中国風俗概観』 | 北京大学出版社1994年5月 |
| 5, 鈴木孝夫『言葉と文化』 | 岩波書店1973年 |
| 6, 『漢語称谓詞典』 | 遼寧大学出版社1988年8月 |
| 7, 『語言文化社会新探』 | 上海教育出版社1989年12月 |
| 8, 『現代漢語辞典』(修訂本) | 商務印書館1996年 |